



「エビデンス」に基づく学校経営

校長 花 松 均

国では 2040 年代の社会を展望した学習指導要領の在り方について審議が進められています。令和 7 年 9 月 25 日に中央教育審議会の教育課程企画特別部会から、次期学習指導要領に向けた「論点整理」が出され、その方向性が示されたところであります。

基本的な考え方として、

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手を「みんな」で育むため、

①「主体的・対話的深い学び」の実装

②多様性の包摂

③実現可能性の確保

の 3 つの方向性が示されました。

私が着目した点として、「自らの人生を舵取りする力と民主的な社会の創り手育成」の部分です。少子化に伴う入試による動機付けの変化、学習時間の減少などが課題として挙げられる中、学びの動機付けをアップデートする必要性が指摘されています。予測困難な時代に、労働市場の流動化や就業期間の長期化、マルチステージの人生モデルへの転換が進む中、しなやかに「自らの人生を舵取りできる力」が不可欠となりつつあります。このため、生徒には、育むべき資質・能力育成の具現化・深化と並行して、一人一人の「好き」（興味・関心）を育み、「得意」を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取り組みが求められています。

そこで、本校では I G S（Institution for a Global Society）株式会社による、生徒の資質・能力と教育活動の教育効果を可視化するアセスメント・ツール「A i G R O W」を活用して、生徒の資質・能力の定量化を図り検証を行っています。従来の生徒の資質・能力の評価方法は、ルーブリック評価や生徒の自己評価が主でありました。生徒の自己評価においては、設問を作成する教員側のバイアスが働くとともに、それに応えようとする生徒の意識が働く可能性もありました。また、ルーブリック評価においては、教育活動を行う中で、一人一人の生徒を教員が観察・記録をして、どの測定基準に該当するかを判断する必要があり、その評価は、個人のバイアスに左右されるものと考えられていました。そこで、本校では、育てたい 5 つの力（資質・能力）を「A i G R O W」を活用することで、生徒の資質・能力の検証を客観的に図ることに取り組んでいます。

1 スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力）の状況

本校の育成を目指す資質・能力は次のとおりです。

育てたい5つの力（資質・能力）

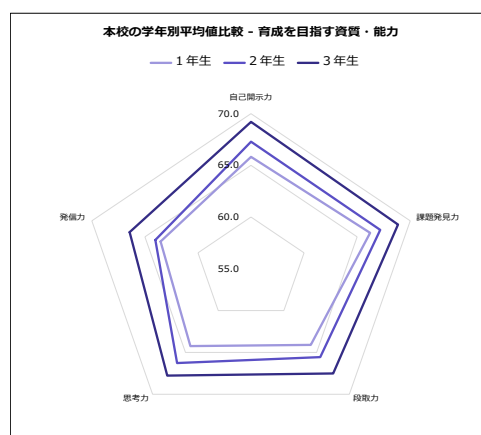
- 自己開示力：自分を知り、学ぼうとすることができる
- 課題発見力：疑問を持ち、課題を見いだすことができる
- 実行計画力：先を見通して、物事を進めることができる
- 思考力：要点をつかみ、多面的多角的に考えることができる
- 発信力：状況に応じて、わかりやすく伝えることができる

〈検査結果〉

本校の育成を目指す資質・能力（育てたい5つの力）については、本校生徒の平均スコアが全国高校生の平均スコアを上回っています。特に、「自己開示力」と「課題発見力」は全学年をとおして高い水準を維持しつつ、学年が上がるに連れて順調に伸びています。

一方で、相対的にスコアが低く推移しているのが、「発信力」です。特に、1年次生から2年次生にかけての伸びがゆるやかな状況にあり、「発信力」の早期からの育成強化が必要になってきます。1・2年次生の段階から、グループワークなどで意図的にリーダー役をローテーションしたり、地域や外部に向けて自分の考えをプレゼンテーションする機会を増やしたりする必要があるとの指摘がありました。

次に、「実行計画力」に係わり、答えのないオープンエンドな探究課題や、想定どおりに進まない外部との協働プロジェクトなど、臨機応援に計画を修正する力などを育むことが求められています。

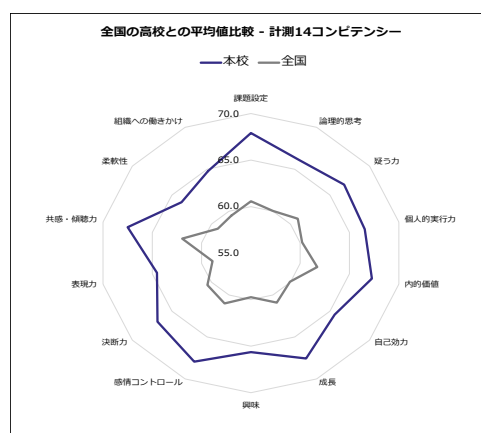


2 全国の高校との平均値比較

本校では、スクール・ポリシー及び生徒の学校生活を支える状態や学びに向き合う姿勢の変化を定量的に把握するために、14のコンピテンシーを用いて計測を行っています。それらを全国との平均値比較した状況です。

〈検査結果〉

本校の生徒の平均スコアは、全国の高校生の平均スコアを上回っている状況にあります。本校の生徒は、困難な状況やストレスの掛かる場面においても自らの感情をコントロールし、それを自らの成長の糧と捉える前向きな姿勢が強く育まれています。自らの課題を見つけ出し、決断して実行に移す主体的な行動力も優れているようです。

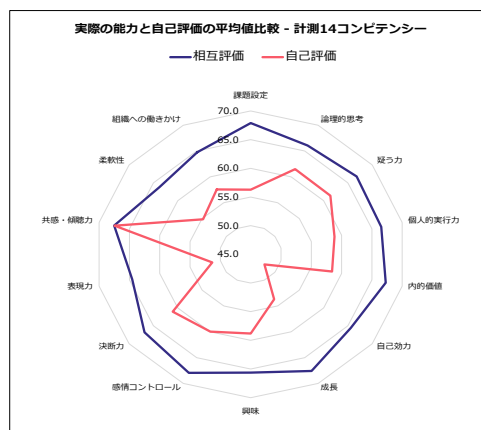


一方で、他者や集団に対しての働きかけや他者を巻き込んでいく能力については課題があります。

3 自己評価と相互評価の乖離

〈検査結果〉

「共感・傾聴」を除くすべてのコンピテンシーで、生徒の自己評価が相互評価を大きく下回る「過小評価」の傾向がはっきりと表れています。特に、「自己効力（何らかの課題に直面しても、自分ならできると自信を持って物事を進めることのできる能力）」、「成長（どんな課題に対しても、自分の成長につながると信じて積極的に取り組むことのできる能力）」、「表現力（自分の考えや思いはもちろん、どんなことでも相手が理解しやすいように伝えることのできる能力）」「課題設定（状況を的確に把握しながら、何をすべきか、どうやって成し遂げるべきかを自ら考え出せる能力）」に大きな乖離が見られます。



このことは、生徒自身が自分の客観的な強みを「自分には備わっていない」と思い込み、著しく自信を欠けている状態にあります。自分にはできないと萎縮しまっていることは、今後の進路選択の大きな阻害要素になってきます。

4 今後に向けて

これらの検査結果から分かるように、生徒はすでに社会に通用する高いポテンシャルを要しているにもかかわらず、生徒自身がそれに気づいていないという本質的な課題が明白になりました。これらのデータから分かるように、データを基に自信を持たせることが急務と考えます。具体的には、「A i G R O W」の個人レポートを用い、生徒との面談で「あなたはクラスの仲間から『自己効力』や『表現力』がこんなに高く評価されているよ」と具体的なデータを見せながら、生徒の強みや成長を積極的に承認していく取り組みを進めて行きます。このように、「好き」（興味・関心）を育み「得意」を伸ばすためにも、客観的なデータという「エビデンス」に基づき、生徒の強みや良い部分を褒めるなどして、生徒自信の過小評価に気づかせ、確かな自己肯定感と自信を獲得させるように努めていきます。

このように、本校では「A i G R O W」の検査結果を活用し、「エビデンス」に基づく学校経営を一層進めて参りたいと考えています。